

序

1. 神経症状で困っている患者さん達の力になろう

脳神経内科では急性期から慢性期まで多彩な疾患の診療を行うが、原因が何であれ患者さん達やそのご家族は神経症状に困っており、日常生活が障害されることに対して不安を感じられている。利用可能な手段を駆使して脳神経系を保護し、さまざまな思いを抱えて受診された患者さん達の Quality of life の向上をめざすことがわれわれの仕事の一つである。そして、適切な診療を行うためには、的確に診断をすることがやはり重要である。

2. 時代が変わっても病歴聴取、神経診察の重要性は変わらない

神経診断学の特徴として、病歴聴取と神経診察を通じて「どのような病態」が広範な脳神経系の「どの部位」に起こっているのかを推測する点があげられる。現代は画像診断全盛であり、また今後は臨床にAIの力を借りることも予想されるが、それでも人の手による病歴聴取や神経診察の価値は色褪せてはいない。画像のみでは確認できなかつた情報が、神経診察により得られることは日常診療でしばしば経験される。

3. 神経診察は初学者でもくり返し行うことができる

プライバシーや痛みなどに配慮をする必要はあるものの、神経診察は年次や専門を問わず誰でも低侵襲でくり返し行うことができる。ときに患者さんを丁寧に診察した際に、思いも寄らず感謝をしていただけることがある。神経診察は単に「診断のための診察」という枠を超えてコミュニケーション手段にもなりうるし、診察を通じて同じ時間を共有すること自体が相手の不安を緩和するなど治療としての側面を持つ場合もある。試行錯誤することで必要な知識や技術が身につくため、レジデントの先生方は積極的に脳神経系を評価し、ベッドサイドや診察室で患者さん達とコミュニケーションをとっていただきたい。独学でも臨床能力は向上していくのだが、指導医による適切な助言が加わることで上達のスピードは加速する。

4. 企画にあたって

本企画では、脳神経内科各分野のエキスパートの先生方に、レジデントの先生方に向けて神経診療の要点を執筆頂いた。第1章ではまず押さえるべき神経診断学や神経解剖学の基本事項を、第2、3章では外来診療や病棟業務において遭遇しうる様々な主訴・シチュエーションごとの病歴聴取と神経診察のポイントを、それぞれ分かりやすくかつ

奥深く解説いただいている。臨床の最前線で活躍されている優秀な指導医陣がどのようなことを考え診療にとり組まれているのか、熱意と臨場感のつまった記事を楽しんでいただきたい。本企画が読者の先生方の明日からの診療のヒントとなり、ひいては日々の診療で出会う患者さん達の役に立つ機会が訪れれば幸いである。

最後に編集に関して多くの助言をいただいた広島大学脳神経内科の松原知康先生にこの場を借りて深謝申し上げる。

2023年6月

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院 脳神経内科

安藤孝志